
ペルソナ4 交わる時・想い・世界

架榎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ4 交わる時・想い・世界

【Nコード】

N9612X

【作者名】

架椰

【あらすじ】

平穏な日常が崩れ、いくばか時が過ぎた。木野宮凧は新たな生活を始める。それは新たな世界との出逢いの予兆……。

親の都合で都会から田舎に越してきた1人の転校生。仲間たちと共に、霧を晴らす光となれ。

これはペルソナ4アニメ沿い(予定)の二次創作です。もちろん、地名や人物はフィクションですからね。○トラス様も関係ありません。

新しい日常、新たな世界（前書き）

今度のメインは、凧ちゃんとなります。
主人公の名前は鳴神悠。

新しい日常、新たな世界

畳4畳半ほどの部屋に、彼女はいた。仏壇に向かって手を合わせ、朝の挨拶を済ませる。

『…これでよし。今日も良い1日でありますように』

写真を一度振り返り、足早に部屋を出た。

リビングの扉を開けると、ふわっと朝ご飯の匂いが漂ってくる。既にテーブルには人数分のサラダやスープが並んでいた。

新聞を読んでいた男性が、こちらに気付き笑いかける。

「おはよう、凧ちゃん」

「今日も早いわね。パンは2枚でいい？」

『おはようございます、おじさん、おばさん。あ、パンは1枚で足りますよ』

私は今、かつての親友の家に居候させてもらっている。両親はこの春から揃って仕事で海外へ行った。「1人になるなら」と、この家——高瀬家に身を寄せた。

椅子を引いて、おばさん達に対面するように座る。いただきます、と手を合わせて食べ始めた。

「——凧ちゃん、この家には慣れた？」

トーストに苺ジャムを塗っていると、おばさんが訊ねてくる。どこか不安げな質問に、心配させないよう手を止めて笑った。

『元々、何回も遊びに来ていたんですよ？勝手知ったる佳織の家ですから』

「そうそう、心配症なんだよ母さんは。そんなんじゃ佳織に笑われるぞ」

“佳織”。

今は亡き、高瀬家の一人娘。去年――高1まで、どんな時も一緒だった凧の親友。

「……あの子が居なくなっって、もう半年は経つのね……。ごめんなさい、暗くなっちゃ駄目よね」

“原因不明”で突然他界した娘。母として、もっとしてやれた事があつたのにと自らを責めた。

しかし、それを止めたのは夫と、亡き娘の親友の少女。

『おばさん、最近、よく佳織の夢を見るんです。』

夢で怒ってました、“何やってんのさ！”って。私は言い返すんですよ、“そっちこそ、何で死んだの!?” そっからは、大喧嘩です。言いたいことを言い合うから収集なんて着かなくて。佳織が決まった一言を言っって、いつもそこで途切れちゃいます』

「決まった一言……一体何なんだい？」

パンの最後の一口分を飲み込んで、牛乳を飲む。グラスを置いて、いつも佳織が言っていた言葉を伝える。

『“うちの分もしつこく生きてくれないと困るんだからね！”……もう耳にタコができそうなくらい聞きました』

私が言い終わると同時に、ニュースの時報が午前8時を告げる。立ち上がって壁に掛けられた制服を取り、腕を通しながら今日の日程を頭の中で反芻した。

『（朝から職員室に行つて……、それから生徒会に顔を出さなきゃ）ごちそうさまでした！今日は部活見学があるので遅くなります！』

「よし、じゃあ各自解散としよう。行つてらっしゃい、凧ちゃん

「気を付けてね、行つてらっしゃい」

『はい、行つてきます！』

……新しく始まる生活。これからは私の隣に居た彼女に誇れるように生きていくこと。

人々の生み出す雑音が、少年を取り巻く。彼は駅のホームに降り立

ち、電車を乗り換える。

「ーふう」

棚にドラムバッグを置き、自分は椅子に腰掛ける。流れゆく景色を見ていたが、やがて意識は睡魔に誘われ遠のいていった。

霧の中、どこからか車の走行音が近づいてくる。長い車体のリムジンの内部は蒼で彩られており、左にはガラス製の棚が備え付けてある。右側にはウェーブの髪をした女性が、正面には長い鼻の老人が座っていた。現実離れた雰囲気の中、老人が口を開く。

「ーようこそ、ベルベットルームへ」

新しい日常、新たな世界（後書き）

次回から両者の新たな生活が始まります。

力の導き・見知らぬ予兆（前書き）

今回は、凧ちゃんサイドオンリーです。

力の導き・見知らぬ予兆

ザワザワと講堂にざわめきが広がる。

『……………うるさいなあ』

ぼつりと零した私の不満は、あつという間にかき消された。今日は入学式&始業式が午前中に行われ、午後は1年の部活動見学会。……の筈が、部活動見学会が取り止めになった。

理由は“生徒の行方不明者続出”。

去年の冬から今年の春にかけて、昼間や夜間に居なくなる生徒が県内で増えている。

ニュースでも騒がれ、既にこの学校からも数人が消えた。

ついには昨日、生徒会長までいなくなったと保護者が今朝、学校に連絡を入れた。緊急だと判断した教職員が、午前だけに日程を変えた。

県警が500人以上という大規模な捜索隊を編成しているにも関わらず、捜索開始から4ヶ月が過ぎたこの状況で、未だ1人も発見できない。

親の中には痺れを切らして、捜索願いを出さず、自力で我が子を見つけようと近所で集まり始めた者もいる。

クラスメイトの会話を聞いていると、やがて教頭先生が教壇前に立ちマイクのスイッチを入れた。

《「えー、静かに。皆さんも知ってるの通り、この学校から何人も生徒が姿を消しました。この非常事態に我々職員は、次のような結論を出しました。」

1つ、今日から1ヶ月は校舎を閉め、休校となります。しかし履き違えてはいけません。皆さんの安全確保の為なので、くれぐれも生徒だけで遊びには出ないように。」

2つ、1週間に一度、学校に電話連絡を下さい。これは本人でなければいけません。そして、なるべく昼間に電話すること。」

最後に、外出する際は保護者同伴を義務付けます。“高校生にもなり何故…”。そう思うでしょうが、君達の身に何か起きては手遅れになってしまいます。私は全員が、無事に卒業して欲しいと願っています。》

話を続ける教頭先生の目元には、濃い隈が出来ていた。他の先生も同様にうつすらと隈を作っている。それだけの事態だという事を受け止めた全校生徒は静まり返って何も話さない。

と、風の斜め後ろから話し声が聞こえる。耳を傾けた彼女は、信じられない事を聞いた。

「（おい、知ってるかよ？どうも隣のクラスの須山って奴が消えた時の状況！）」

「（何かあるのか？何人も消失してんだし、集団的になんかやっただか？）」

「（んな訳あるか！噂だけだな、ショッピングモールの電化製品売り場で見たって奴が言った。“一瞬目を離したら、次には消えた”んだと！）」

「（まるでマジックだな！それがほんとなら、居なくなつた連中も似たような消え方した…？）」

そこまで会話していた男子2人だったが、教師に見つかり注意された。

「キーンコーンコーン……」。

「終わり！部活見学会無いかガツカリ。凧、帰ろ！」

『実袖、ごめん。今日は用事があるの』

腰までの茶髪を左右で結んだ女子が、凧の机までやって来た。彼女の誘いに、鞆に用具を入れながら片手を立てて謝る。
今日は佳織の墓参りに行くつもりだった。

「ひょっとして、佳織の所？」

『これからだと、あまり行けそうにないから。一緒に行く？』

「ううん、あたしはいい。気を付けてね」

『例の消失事件でしょ？すぐに帰るし何も起きないよ、きっと』

「……………それ、フラグだよ？」

真顔で言い寄る実柚は、本気で凧を心配していた。

実柚はあの日、“佳織が倒れた”と凧から連絡を受けた後、塾を飛び出して病院に向かった。慕っていた友人の死を目の前で失った悲しみに泣き叫ぶ凧を、正直見ていられなかった。

嫌な予感が拭えないまま、教室から見慣れた姿が出て行くのを見送った。

「有り難う御座いましたー！！」

店員の声を背に、凧は花屋から出た。佳織が好きだと言っていたコスモスや鈴蘭の花束を持ち、近くの墓地に足を運ぶ。

やって来たのは、小さな墓地。20にも満たない墓石が並び、静かな丘の上に作られた魂の安息の場所。

“高瀬佳織”

そう刻まれた墓石の前に、先ほど買った花束を置く。ここに来ると

胸に去来する、どうしようもない空虚感と後悔、そして怒り。

「……佳織、こっちは大変な事が起きてる。学生が大勢居なくなつて、警察も右往左往で。けどね、私はあんまり……っていうか、何も感じない。」

「……私、もう一度会いたいつ！夢じゃなくて、ちゃんと、ちゃんと会いたいよ……佳織……！」

決意しても、辛い。大切な存在が無くなったこの辛さは、どこにぶつけばいいのか分からない。

溢れてくる涙で視界が歪む。拭いもせず、その場に座り込んだ。

……どれだけ泣いたか。空が夕焼けに染まり始めた頃、凧は立ち上がった。と、何か飛んで来る。蒼の鱗粉を散らしながら羽ばたくそれは、

『蝶……』

見たことのある蝶だった。しかし、何故ここにいるのか。気にする間もなく、蝶は数秒後には凧の側を飛んでいた。少し手を伸ばせば、方向を変えて飛び去ろうとする。

知らず知らず、足は蝶を追い掛ける。ちらつと後ろを見れば、なんとなく墓石の隣で佳織が手を振っていたように見えた。

『待つて、ねえ待つてっば!』

林の中に入り込んで行く蝶をひたすらに追い掛ける。すると、蝶は突然形を変えた。

それは……蒼い扉。

『こ、れって……』

足が急ブレーキを掛けて立ち止まる。信じられずに眼前を凝視する。あり得ない。

――本当に、そうでしょうか？

『……!』

林に響く透き通った声。聞き覚えがありすぎる声は風にも構わずに続ける。

――私達は、道を切り開くお手伝いを致します。求める事柄に辿り着く事ができるか、それは貴方次第。

『私…次第ー！』

凧が望んだのは、今は亡き親友。この世の理を無視する、心の叫び。

『……“戻って欲しい”のは本心。けど、そんなの無理だって分かってる。

それでも教えて！佳織に続く道があるなら私はー、違う。“私達は進まなきゃいけない！佳織に死んでから顔が向けられないなんてことにはなりたくない！！”』

かつてこの国の大地を作り上げた男神は、亡き女神を黄泉より連れ戻そうとして叶わなかった。死者は死者。生者は生者。理には適わずとも、会いたいと願うことは許される筈。

ー稀有な力なのね、貴方も。いいわ、いらっしやい。

扉が開く。そこからは風と光が溢れ出る。

『おばさん、おじさん、ごめんなさい。

……行ってきます！！』

1歩。必ず戻ります、と言う少女の呟きは風に吹き消された。

力の導き・見知らぬ予兆（後書き）

次回からは、物語に突入します。

Level 0…開幕(前書き)

変な所で物語が切れたりもしますが、そこは予めご了承ください。

Level 0…開幕

《八十稲羽、八十稲羽ー！。 終点、八十稲羽です。 お忘れ物のないよう……》

「…着いた」

ここに来るまでに、不思議な夢を見た。
鼻の長い爺さんが何か言っていたけど…。

「とりあえず、降りよう」

棚からバッグを下ろし、肩に提げて電車から出た。

「おーい、こつちだ！」

駅の改札を出て辺りを見回していると、声が掛けられた。 見ると、ワイシャツを着た男性がこちらに手を小さく振っている。 男性の足には小学生の女の子が寄り添っていた。 どうやら、この人が堂島さんらしい。 少し強面な感じだけれど、良い人だと直感する。

昔の俺について話すけど、申し訳ないことにこちらは覚えが無かった。

それから堂島さんの車に乗り、ガソリンスタンドに向かう。 途中、車内で奈々子ちゃんに飴を買った。 たぶん初対面だから緊張しているんだろう。

「らっしゃっせー！」

少し走つたら、スタンドに着いた。意外だったのが“MOERU 石油”…。燃える石油？危なっかしい名前だな。

そんな事を考えていると、店員さんに声をかけられた。

「キミ、高校生？」

「ええ、高校2年です」

どこか不思議な雰囲気を漂わせる彼。今時、灰色の髪なんて珍しいな……俺も人のことは言えないけど。

「都会から来ると、なーんも無くてビックリっしょ？」

「そうですね。でもこういう静かな場所って、嫌いじゃないです」

「お、嬉しいこと言ってくれるね。けど実際、退屈すると思うよー？高校の頃っていったら、友達んちに行くとか、バイトくらいだから。」

でさ、ウチ今バイト募集してんだ。ぜひ考えといてよ、学生でも大丈夫だから」

歩み寄ってきた店員さんと握手を交わす。それから店長に呼ばれ、彼は中に戻っていった。

握手した手を見た瞬間、目の前が一瞬真っ白になり頭痛が襲ってきた。

「……！」

頭を抑えていると、「大丈夫？」と車の影から奈々子ちゃんが姿を見せた。

大丈夫だよ。と笑って返すが、彼女の表情は晴れない。

「あんな店員いたか…？」

「あ、お父さん」

一服し終えた堂島さんが戻って来て、俺たちは堂島家に向かった。

「今日からここがお前の家だ。荷物は2階に運んである」

「ありがとうございます。1年間、宜しく願います」

居間に足を踏み入れ、歓迎を受ける。いつもは惣菜やインスタントものしか食べないらしく、朝は奈々子ちゃんが軽い朝食を用意するのだとか。

正直、体に悪い食生活としか思えない。

「んじゃ、歓迎会といくか」

「（パツクの寿司…、2人の健康が不安になってきたな…。）いただきます」

食べ始めようとしたら、堂島さんの携帯が鳴った。どつちやら事件らしく、慌ただしく出て行ってしまった。

「お父さん、またおしごと……」

「堂島さん、何の仕事してるの？」

不満げに口をとがらせる奈々子ちゃんに聞いてみる。

「けいじなんだって。わるい人をつかまえるのがおしごとって、お父さんいつてた」

「そっか、大変だね」

食事も終わり、用意された自室に入る。

勉強机、アルミの棚、ソファにテレビ。

必要最小限の物しか無かったけれど、1年ならこれで十分。

荷物整理を一旦止めて、ソファに座り込んだ。

「今日から、ここで1年、か……」

次の日、転校先の八十神高校の教室には教師が転校生の紹介をしていた。

カリカリと、名前を黒板に書く。

「あー転校生を紹介する。ただれた都会から、へんぴな地方に飛ばされたいわば“落ち武者”だ。さつさと自己紹介しろ！」

「…鳴神、悠です。宜し「貴様ア！今、窓際の女子生徒に妖しげな視線を送っただろう！」！？」

いきなりのことに、悠は肩を揺らして教師―諸岡に振り向いた。よくわからない内に、転校早々説教を喰らわされる。どうすればいいか悩んでいた時、一人の女生徒が手を挙げた。

「センサー、転校クンの席、ここでいいですか？」

緑のジャージを着た彼女が指したのは、自分の隣だった。数瞬の沈黙の後、「さつさと席に着けっ！」と怒鳴られる。

「あいつ“モロキン”っていうの。最悪でしょ」

「まあ……」

面白くなさそうに囁いてくる先程の少女。このクラスではあまり良い先生じゃなさそうだ。そう悠は結論づける。

鳴神悠の田舎暮らしは、こうして始まった。

Level 0…開幕（後書き）

次回はマヨナカテレビの噂から。

Level 1 : マヨナカの噂 (前書き)

初・インターネットです。

Level 1…マヨナカの噂

「ねえ、“マヨナカテレビ”って知ってる？」

最近、八十稲羽で噂になっている“運命の相手”が見えるモノなんだとか。学校帰りにジュネスへ寄り、そんな事を里中千枝と花村陽介から聞いた悠は、半信半疑で夜中にテレビ前に立っていた。

今日は朝から霧が出ていて、視界がききづらかった。ついでに外は雨が降っている。

深夜12時。電源の入っていないテレビを観察していた悠は、結局何も起きない事に若干つまらなさを感じながらテレビに背を向けた。だが、異変は直後にやって来た。

——我は汝……

「ーッ!？」

前触れも無しに、脳に響く声。幻聴かと思ったが、それにしては声は意志を持っているように感じる。

(なんだ、この声…!?)

ふらつく体を、どうにか気力で押し留める。外で雷が光った瞬間、それは起きた。

ザザツ……と付いていないテレビにノイズが走り、おぼろげに女性らしき人物が映し出される。何かを払おうともがく人物は、どこか見覚えがあつたが思い出せない。

悠の脳裏をよぎったのは、昼間に千枝が言っていた噂。

しかし確認する間もなくテレビは消えた。不思議に思った悠は、指先で画面に触れた。

「…！テレビが……」

水面に石を投げた時のように、波紋が広がった。試しに手を差し込んでみると、なんと手が丸ごと呑み込まれた。

「うわっ…！」

慌てて引き抜こうとすれば、逆に内から引つ張られてしまい、頭までテレビに入ってしまった。

なんとかしなければ、と目一杯テレビの縁に手をつけて出ようと試みる。

その結果、抜けた頭は勢い良く後頭部からテーブルに激突した。ゴンツ！と鈍い音がして、思わず頭を押さえてうずくまる。

「…だいじょうぶ？すごい音だよ？」

ドアの外から、菜々子に声をかけられた。今ので起こしてしまったらしい。

「平気だよ。もう遅いから、おやすみ」

「うん、おやすみなさい……」

「テレビに頭が入った？」

「鳴神君、寝ぼけてたとか？あり得ないっしょ」

次の日、学校で昨夜の話をする。と案の定信じてもらえなかった。普通の反応だと思いが、事実なのは変わらない。

「じゃあ、もつと大きいサイズなら体ごと入るのかな？」

「それなら、ジュネスの家電売場にでかいのがあるぜ。試してみるか？」

そんな訳で、悠たちは今家電売場にある一番大きなテレビ前で佇んでいた。

先に千枝と陽介が試すが、何も起こらず、そのまま千枝のテレビ購入について少し離れて話した。

「……………」

今度は、悠がテレビに手を当てると昨夜と同じように手が入った。気付いた2人が驚く中、体も波打つ画面に突っ込んでみる。

「中は相当、広そうだ」

「何で入ってんの！てか中ってナニ！？」

騒ぐ千枝は、陽介が「客、来る！客！」と知らせたことで更に慌てる。

事態の収束を図る彼らだったが、バランスを崩し、3人はテレビに呑み込まれていった……。

「うわっ！」「いてっ！」「うぎゃっ！」

悠、千枝、陽介の順に床に落下する。打った箇所をさすって立ち上がったそこは、どこかのスタジオのようだ。

「なに、JJJ…?」

不安げに声を発したのは千枝で、状況を把握できている様子ではない。かく言う悠も、どうしてこんな空間がテレビの中にあるか、皆目見当がつかない。

「とにかく、出口がないか探そうぜ……」

「そうだな。早くしよう」

陽介の提案から、付近を探索することにした。しばらく歩くが辺りは霧が立ち込め、とても誰かがいる気配は無い。

奥に進むと、壁一面にポスターが貼られ、天井からは首吊り用としか思えないロープが吊された部屋に辿り着いた。

「うわ、なに…？気味悪い」

「…このポスター、どこがでー」

考え込む悠を、千枝が「早く出よう」と急かす。陽介のトイレ発言もあり、部屋を出る事にした。

Level 1 : マヨナカの噂 (後書き)

悠のペルソナ覚醒については次回にやります。

Level 2… 我は汝、汝は我（前書き）

先ほど修正しました。

Level 2… 我は汝、汝は我

外に出ると、霧の奥から足音が聞こえてくる。人…ではない。ぴこぴこ、というような足音だから。無意識に警戒する悠たちの前に現れたのは、ぬいぐるみとしか形容のしようがない生物だった。

「んなーっ、どうしてニンゲンがいるクマー!？」

「…ねえ、鳴神君。こいつ、一体ナニ？」

「（俺に訊かれても…花村は？）」

「（え、俺に振るのかよ！つか知らねーし!）」

思わず顔を寄せ合ってコソコソと相談し合う3人。その間にも、正体不明の生物は1人(?)で騒ぐ。

いわく“誰かがニンゲンをこの世界に入れてる”らしい。あと最近“シャドウがよく出て迷惑している”とか。訳がわからずにいると、クマ(本人自称)は突然怯えだした。

「あわわわ、シャドウが、シャドウが来るクマーーッ!」

「ちよ、おい!」

陽介が引き留めようとしたが、時既に遅し。彼らの目の前には、クマが シャドウ と呼ぶ存在が現れ、全員が広場まで逃げるが囲まれてしまった。

縦にピンクと黒のツートンカラーに、舌だけ異様に大きい怪物。千

枝は怪物に舐められた事で気を失ってしまい、陽介も腰が抜けて動けない。
だが悠だけは違った。腕で顔を庇った彼は、自身に起きた異変を感じ取った。

――我は汝……

(…あの時の！)

脳裏に再び響く声。声は続ける。

――汝、双眸見開きて、今こそ発せよ！

「へ。」

足元に、何かが浮かぶ。同時に何かか…力が湧いてくる。

「ル」

蒼い光が、身体を包む。陣は、はっきりと白黒の模様を描く。さながら“仮面”のような画を。

「ソ」

目の前に出現したカードに、手を添え…

「ナ…！」

握り潰した。

「パーキイン！」

硝子が砕け散る、澄んだ音がして悠の背後に“それ”は現れた。身の丈2メートルはある身長。黒の学ランを着て、手には矛を握る。しかし人ではあり得ない金の瞳は、真っ直ぐにシャドウたちを睨みつける。

「……………鳴神……………」

陽介が、座り込んだまま呆然とクラスメートを見上げる。対して彼は、フツと笑った後シャドウたちに向かって行く。

「……………ペルソナっ！」

「パーザンツ！」

1体目。漆黒が矛を振り払うとシャドウは塵と化した。しかし、そこに2体目、3体目が体当たりを食らわせる。ダメージは悠にも伝わり、1歩後退する。

「っ、こんのお…っ！」

イザナギは2体目を掴み、3体目に目掛けて投げる。まとめて矛でシャドウを貫き、最後に――

「イザナギ！」

手を突き出した先にいるのは、瀕死のシャドウ。雷撃を浴びたシャドウは断末魔の叫びを上げて、全滅した。

「“ペルソナ”……。これが、俺の力……」

信じられない出来事だったが、この身で体験した事是否定のしようがない。

「立てるか、花村？」

「あ、ああ……。サンキュ」

手を貸し、花村を立たせる。先ほどの事を彼は訊いてくるが、実のところは悠にもよく解らない。

「う……うん……」

「里中！大丈夫か？」

目が覚めたららしい千枝は、シャドウをキョロキョロと探す。

「ねえ、あの怪物は？」

「ああ、あれは「こいつが倒した！」ちよっ……」

まるで自分が倒したかのように生き生きと語る陽介。怪物が居なくなった安心感と、悠の力を見た興奮とでテンションが高い。その後2人から質問責めに遭っていると、クマが出て来て3人を3段に積み重ねたブラウン管テレビに押し込んだ。

「ふーっ、これでクマの所にもうニンゲンは来ないクマね！」

クマクマー。クマーはぷりちーなクマクマよ。

そんな鼻歌を歌いながらクマが広場から消えた頃、1人のニンゲンが姿を見せた。

『……よかった。バレずに済んだみたい』

ほっとしているのは、既に八高の制服を着ていた凧だった。

彼女の足元にはペルソナの陣が微かに光っており、隣には深紅の眼をして藤色の着物を纏い、赤く明滅する刀を持つ女性が控えている。その後ろでは、彼女に斬り捨てられた増援と思われる。失言のアブルリー。数体が塵になっていくところだった。

『ありがとう カナヤ、助かったよ。』

『ていうか凄いな、気配の遮断までできるなんて』

グーパー、グーパーと手を動かしながら右手を見つめる。凧にしても、さっきまで別の場所に隠れていたならシャドウが出て来てビビったので自然とここまで逃げてきたのである。

そもそも、なぜペルソナが覚醒したのかというと、話は数日前に遡る。

凧は目を開けたら、蒼で統一されたリムジンの車内に居た。扉が現れた時点でわかっていたつもりだったが、ほんの少しの動揺はあった。すると、

「…お応え頂き感謝します、木野宮凧様。

ご存知の通り、私が貴方に呼び掛けさせて頂いたマーガレットにございます」

『…………… やつぱり、そうだったんですね。私の“心”がわからないと、あんな風には呼べないと思いました。だから、案内に蝶を飛ばしたんですか？』

はい、と静かに頷くマーガレット。その表情は、とても柔らかかなものだった。

「フフ、面白いお客んだ。私はイゴール、存じておられますかな？」

『はい、知っています。…教えて下さい、ここに私が居るのは、貴方たちの手助けが必要だからですか？』

凧は胸に手を当てる。普段より僅かに速い心臓の鼓動が、彼女の中で何かを告げている。心がどこかに行きそうな感覚を覚えつつ、ベルベットルームの住人たちに目で問いかける。

先に答えたのは、イゴールだった。

「左様。貴方の力は使いこなせば、彼の地に煙る霧を晴らす大きな鍵となりえるものなのです」

『…それって、ワイルドの彼じゃ？』

「彼もまた、霧を晴らす可能性を秘めた者です。しかし、それは絆を結んだ者たちとでなければ成し得ない事。

貴方が秘める可能性は、別の道を照らす光を生み出すのです」

凧は、マーガレットの言う事がいまいち理解できなかった。わかったのは“自分がワイルドではなく、別の力をもつであろう”事実。

「1度にお客人が2人…稀なことですが、それ故に私どもの案内にも力が入る…」

さあ、力の欠片をお渡ししましょう」

イゴールが宙で軽く手を握り、開いた。

手袋からフワリと離れた1枚のカードは、凧の手元に飛んで来る。

手を伸ばせば澄んだ音を立てて意識の片隅に宿った。

目を閉じ、姿を瞼の裏に視る。分身となるのは白い毛並みの淡い紫色をした瞳をもつ3尾の狐。

『金屋子神 ……。カナヤ、で良い？』

静かに問うと、狐は名を気に入ったらしく一声鳴いた。

『だけどシャドウを見たら姿が変わるんだもん、吃驚しちゃった』

狐に戻ったカナヤに声をかけると、ふさふさな3尾の内の1尾が緩やかに手に回る。まるでじゃれついてくるような動きに頬が弛む。自分自身ながら、結構可愛い。

その時、ピタリとカナヤが歩みを止めた。白く体が発光し、人型に変わる。その先では新たなシャドウが行く手を塞いでいた。

『たしか、ヤクシニーだっけ？それに アンズー … ナタタイシ までいる……。なんで？』

首を捻っていると、シャドウたちは一斉に飛びかかって来た。

『うわっ反則だよ！お願いカナヤ、《マハラギオン》！』

凧の声に応え、カナヤが宙を滑空する。

容赦ない斬撃でナタタイシを一閃し、怯んだ残りを猛火で焼き払った。

『…すつこい。カツコいいね、カナヤ』

何事も無かったかのように精神に戻ったペルソナに、思わず拍手を贈った。これなら、戦闘経験を詰むのも苦労はしにくくなりそうな気がした。

Level 2… 我は汝、汝は我（後書き）

風がペルソナに覚醒したのは、時間的に悠が転校してくる2〜3日前です。

Level 2.5…紅鳥と白狐(前書き)

雪子と凧の出会いから、天城屋旅館に居候するまでの話です。

Level 2.5…紅鳥と白狐

『ただいま帰りました』

「あ、お帰り凧ちゃん」

私が今いるのは、天城屋旅館の裏口。実はある出来事から、旅館の1室を借りて数日前から居候させてもらってるんだ。

出迎えてくれたのは天城さん。仲良くなってきたから最近はお互いを名前で呼び始めた。私は“雪”って呼ばせてもらってる。

『はい、頼まれた食材買ってきたよ。お釣りは財布に入ってるから』

「大根、人参、玉ねぎ、お豆腐…。うん、ありがとう凧ちゃん」

『お礼なんて別にいいよ、こっちは当然の事をしてるだけ。そろそろ交代しよ？掃除は私がするよ。雪は休憩しなきゃ』

「うっん、大丈夫。跡取りなんだか『はい休憩タイム！女将さんには私が言っておくから』えっ、凧ちゃん!？」

有無をいわさず、自室に雪を連れて行く。隠そうとしても、疲れるのは丸分かりなんだよ！

(伊達に“冒険家”のストッパーやってた訳じゃないの。あの調子じゃ素直に言わないと倒れるよ)

女将さんに一言断って夕食準備前の厨房を借りる。何か甘い物を作

ってあげよつと。

「ーふう。ありがとう、凧ちゃん」

自室に戻って、窓を開ける。吹き込む風が気持ち良い。

数日前に、鮫川の河川敷で出会った見慣れない女の子。初めて会った時は不思議な感じだった。

1人でこの町に来たって言ってたけれど、財布や学校の鞆以外は何も持っていなかったから「旅館に泊めてあげると」言ったら、その日の夜に「何でも手伝うから住み込みで働かせて欲しい」って頼まれた。

驚いたけど、旅館のみんなは許可を簡単にくれた。それから私は彼女の先輩となって、一緒に修行をしてる。よく働くから、お客さんからも好印象だし優しい。

千枝にも紹介したら、2人共すぐに仲良くなった。

「私は、『雪？入っていい？』あ、うん。どうぞ」

ー2人が羨ましいな、なんて考えていたら凧ちゃんの声が襖越しに聞こえて慌てて返事をする。

失礼しまーす。そう言って襖を開けた彼女は手に小さなお盆を持っていた。

『疲れた時には甘い物。そういう訳で四六商店で買った苺大福、どうぞ。後、こっちの練りきりは私が作ったんだ』

お客さんに出すように、スツとお盆を机に置く。その上には皿に乗った苺大福と少し形の崩れた練りきりが乗せられている。温かいお茶も、隣で湯気を立てていた。

目が合うと、『女将さん以外には秘密ね。雪つてば疲れてるのが丸分かり』なんて微笑まれる。

そんなの悪いよ、と首を振ってもさらりと流される。

『代わりに廊下でちよつとつまづいちゃったから、後ろの帯を直してもらえない？』

クルツと後ろを向いて背を見せる彼女の帯は、少し形が歪んでいる。

「ーはい、直ったよ」

『ありがとう。そうだ、雪に言わないと』

何だろう…？

『私、来週から八高に通う事になったの。試験にも合格したよ！』

「本当に？おめでとう！」

『これも、雪が勉強教えてくれたおかげだよ。すごく分かり易かった！公立だから学費は心配しなくて済むし、教材は自腹で買うから大丈夫だしね。』

あ、でも制服…「お母さんが、近所の人からお古を貰ったって今朝言ってたの。解決済みだよ」そりゃ、頭が上がる！ますます頑張らないとー！』

むん、と握り拳を作る。しばらく談笑してから、2人はそれぞれの修行を再開した。

「ただいま」

『お帰り、雪！』

次の日、雪はクラスに転校生が来た事を教えてくれた。私の編入はもう少し後だから…雪の救出までには入りたいと思ってる。

お互いに仕事をこなして、入浴中。突然カナヤが姿を見せた。

『えっ！？ちよつとカナヤ、お風呂の最中はさすがに………カナヤ？』

全身の毛を逆立てて何かを威嚇している。触れようとしたら、凄まじい熱気を放っているのに気付いた。

『カナヤ、落ち着きなさい！一体どうしたの？』

浴室に反響する私の声で冷静になったのか彼女はすまなさそうな表情をしてから消えた。釈然としないまま、布団に潜り込んでから思い出す。

今日、四六商店で買い物を済ませて帰ろうとした時、何かに見られているような気配を感じた。4月11日。悠が稲羽市に越して来た

時間帯に私はちょうど帰る時だった。スタンドの“彼”には会わないでいたけど、噂としては既に数日前から広まっていた筈。

『目、付けられちゃったかな？』

不安を抱えたまま、その日は意識を睡魔に委ねた。

Level 2.5…紅鳥と白狐（後書き）

あれこれ悩んだ結果、旅館の住み込みという設定にしました。

Level 3…立て続けの転入生(前書き)

アイデアがあるうちに投稿していきます。

Level 3…立て続けの転入生

「おい、鳴神！」

朝、登校した悠の机に寄ってきたのは陽介だった。彼の話によれば、またこのクラスに転入生がやって来るとか。

「おっはよー！どしたの2人共？」

元気に話し掛けてきた千枝に、陽介は転入生の件を告げる。しかし彼女の反応は…

「ああ、うん知ってるよ。あたし友達になつたし。あの子、雪子の旅館で住み込みながら働いてるって聞いた」

「なっ、マジかよ天城ん家で!？」

あっけらかんとした答えに、陽介が大声を出す。1週間以内に、2人目の転入生が来たら誰でも驚く。しかも千枝と雪子は友好関係を結んでいる。

「貴様ら、席に着け！」

ざわつく教室の雰囲気叩き壊すように、荒々しくドアが開け放たれてモロキンが入って来た。後ろでは転入生が微かに眉をしかめている。

「都会モンは物好きしかおらんようだな、辺境にも等しい田舎に越してくるなどどうかしとるわ！」

「貴様もさつさと自己紹介せんか！」

『…木野宮凧といいます。1年間、宜しく願います』

「ー初めて転入生を見た感想。すっげえ可愛い。」

クラスの男が釘付けになる美少女だった。1つに結ばれて、肩より下まである髪がゆらりと揺れた。

「つても、鳴神はあんま反応してねーけど。」

ぺこりと頭を下げた木野宮さんは、一瞬…本当に一瞬だけモロキンを洗い顔で見た。そして、鳴神すらやらなかった事をやってのけた。

『諸岡先生、私に自己紹介の時間を下さるのは嬉しいのですが、ご自分のクラスに対してこのような態度を取るのには少々問題があると感じます。』

「いえ、失礼しました。あまりに巧みな話術だったのでつい感想が。さすが倫理を担当する先生ですね』

(モ……………モロキン相手にいきなり喧嘩売ったー！ツ！)

クラス全員が、この瞬間彼女を尊敬した。

「このような態度を、人は“慇懃無礼”と言います。」

「言われたモロキンは顔を真っ赤にして「貴様の名も腐ったミカン帳に名を刻んでやるっ！」と吼えた。」

「けど、木野宮さんはそんなのどこ吹く風で。微笑みを残して近くの」

…ちょうど里中が手招きして指し示した席に座った。

激怒するモロキンと、“女勇者”木野宮さんの話は、すぐに校内に広まった。休み時間、俺は木野宮さんの所に向かった。里中と鳴神も一緒だ。

『千枝！今日から宜しくね。校内とか案内してくれると嬉しいな』

「いや、すごかったね！あんなにモロキンを怒らせたの、多分屈が初めてだよ」

イエーイ、なんてハイタッチを交わす2人は何年も友人をやっているようだった。少し前に初めて会ったなどとは考えにくい。

「あ、あの木野宮さん！」

『うん、花村君：だよ。雪から聞いてるよ』

なんと、既に彼女は俺を知っていた！嬉しさからメモ帳とペンを取り出して連絡先を書いて渡そうとしたら、里中に蹴られた。否、蹴り飛ばされた。

「ちょっと花村、あんた尻にナンパしてんじゃないわよ！あ、全然気にしないで。こいつ結構いい加減だから」

正龍伝説の時みたいに、床に倒れ込んだ俺を好き勝手に言う里中。俺、ナンパしたつもりなんかねえのに…。

「花村、大丈夫か？」

側にしゃがんだ鳴神の気遣いに、不覚にも涙が出かける。その間に里中が木野宮さんの手を取って教室から出て行っちまった。
…ドンマイだ、俺。

「そついや、こんな事してる場合じゃなかった！ストップ、里中！」

「何、花村？」

慌てて起き上がって、里中を呼ぶ。聞こえたらしく、木野宮さんを連れて戻って来た。ちゃっかり手は繋いだままだけど。

「今日、これからまた“あっち”に行く。里中也来てくれ」

「ちよっ、もういいじゃん！この前あんな目に遭ったばかりなのに！」

「俺たちを止めようとするのはわかる。けど、今なら鳴神もいる。小西先輩が死んじゃったのに、何もせずにいるのは俺には無理だ」

だから頼む。そう言うと、里中はしばらく黙ってから渋々承諾してくれた。

「しょうがないなあ。ごめん風、今日は先に…あれ？」

キョトンとする里中。ドアの側に居た筈の木野宮さんがいつの間にか居なくなっていた。

「先に帰ったんだろ？旅館とか忙しいだろうし」

なるほど、鳴神の言う通りだろうな。納得して、俺たちはジュネス

に足を運んだ。

「キ、キミたち、どうしてまた来たクマ!？」

家電売り場から再びテレビに入った悠たちを迎えたのは、あの時強制退去させたクマだった。

「へへ…、ちょっと、真実を確かめにね」

「カツコつけてる場合じゃないだろ花村。
ここに入れられた人がいた筈なんだ。俺たちはそれを調べに来た。
何か知っていたら教えてくれないか？」

「むむ…、でもきつと、またシャドウが出るクマ。センサーがどうにかしてくれるなら、案内するクマよ」

「（センサー？）わかった。頼む」

2頭身しかないクマは、それを聞くと今度は陽介に向き直った。若干小馬鹿にするような視線を向けて。

「ヨースケはどうするクマ？シャドウは人間を襲う。クマはいつも、

シャドウが出る前に逃げるから問題ないクマねー」

「だーっ！クマクマうっせーな！俺もな、今回は考えてんだよ。この通り命綱だつて……って切れてんじゃん！」

テレビに入る前に千枝に渡したロープは、途中でぶつとりと切れていた。こうなると、帰る手段はクマしかない。

「うっ…マジか。いざとなったら、このゴルフクラブで殴ってやる」

「センサー、クマはシャドウを調べられるクマ！サポートは任せんしゃいー」

あるかないか判断しにくい胸を自慢気に張るクマ。だが…

「お前も大して俺と変わんねーだろー！」

「うおっ！お、起こして欲しいクマ〜…」

「……………」

ポン、と軽く陽介に押されただけで後ろにひっくり返ってしまったクマは、悠が助けるまで手足をバタつかせるしかなかった。

Level 3…立て続けの転入生（後書き）

今回はVS陽介の影です。

Level 4…心の影(前書き)

V Sシャドウ戦は、2部に分けて投稿していきます。

Level 4…心の影

「嬢ちゃん、こっちにビール1本！」

『少々お待ち下さい。今お持ちします』

団体客が宴会をする中、凧は与えられた着物を着て広間を歩き来していた。笑顔で客にビールを渡して、一旦自室に引込む。

『帰り際に聞こえた話からすると、ジュネスに今頃はいるんだよね、鳴上君たち…』

パチン、と横髪を留めていたヘアピンを外し、髪を解き直して1つに結ぶ。

「…少しだけ、様子を見に行こう。」

私服に着替えて、女将さんに一言断ってからジュネスに走る。

（出る幕は、まだ早いといいな…）

「ここ、小西先輩の酒屋…」

クマに連れてこられたのは、商店街に瓜二つの場所だった。だが景色は決定的に違う。赤と黒の空が波打ち、異様な雰囲気、拍車をかけている。

意を決して店内に入る。店の中央にはテーブルがあり、上には酒瓶が数本転がっていた。数歩進んだ陽介が、床に落ちている1枚の写真を見つけた。

「これ、ジュネスで先輩と撮った写真…」

顔の部分が切り裂かれてそこだけを見れば判別しにくい、間違いない。写るのは陽介と早紀。

「何度言えば分かるんだ、早紀！お前は近所からどう言われてるか、知らない訳じゃないだろ！」

「これ、先輩のオヤジさんの声か？」

店の中で、中年男性の音がする。怒鳴りつける声は止まらず、ジュネスへの非難はエスカレートしていくばかり。声はやがて、早紀のものに変わった。

「ずっと、言えなかった…。私、花ちゃんのこと……」

「え、俺のこと…」

少しの間を置き、早紀の声が変質する。躊躇いを捨てた……本心が。

「ウザいと思ってた。仲良くしてたの、店長の息子だから都合良か

っただけなのに…ホント、ウザい……」

「ウ、ウザい…?」

予想外の一言に、陽介の心が痛む。が、声は止まらない。更に彼を傷つけていく。溜め込んできた物を吐き出していく早紀の声は、次第に憎しみすら帯び始める。

「ジュネスも、親も、商店街も…！全部、無くなればいい……！」

「ウソだ…。ウソだっ！」

耐えきれなくなった陽介が、頭を抱えて膝をついた。

「…こんなの聞きたくない。やめる。自分の中の“先輩”を壊すな……！」

「やめてくれ……。先輩は…こんな人じゃないだろ!？」

感情が高ぶるまま、陽介は絶叫した。聞いた事を切り捨てる勢いで。しかしこの場所は、彼をさらなる地獄へと突き落とす。

「悲しいな…。可哀想だなあ…俺…」

「…!?!?」

バツ、と2人は振り向いた。背後で両手を広げて立っていたのは、見間違える筈もない。

声の主は…“陽介”。

(何だ、あれ…花村じゃない！)

“それ”が異質だと、悠は直感した。まるで陽介の皮を被った“ナニカ”…。

「てか、何もかもウザいと思ってんのは、自分の方だったの…あはは…」

「あ、あれ…ヨースケが2人…クマ…？」

クマが呟く声は陽介の声にかき消された。向かい合う“陽介”たち。ドッペルゲンガーの陽介は、金の瞳を妖しく光らせて陽介を言葉でズタズタにしていく。

「小西先輩の為にこの世界に来た？全く、笑えるぜ。お前は単に、この場所にワクワクしたんだ。“大好きな先輩が死んだ”っていう、らしい口実もあるしさ。あわよくば、ヒーローになれると思ったんだよな？ド田舎暮らしにはウンザリしてるもんなあ！？」

ビクリ、陽介の肩が震える。今まで自分が目を背けてきた事が人に知られる事に、心はどうしようもなく恐怖を感じた。

「…ッ！違う、俺はそんなこと、思ってな「今日だってそうだ」な、何が…」

動揺を隠せない陽介に、それは刃を突き立てる。容赦なく残酷に、残忍に。愉しくて仕方ないと言うように。

「今度の転校生は可愛い女子。しかも里中たちとは仲が良い。…お前は嫉妬したんだ。寂しさを紛らわせたいから、無理矢理にでも輪に入ろうとした！」

頼られたいよな？同じ転校生同士、鳴上や木野宮に頼られたらさぞかし嬉しいよな？

結局、お前はそついや奴だ。他人に媚び売ってヘラヘラ笑って、取り繕うしか脳のない“臆病者”なんだよ！」

「違う…違うツッ！！お前誰だ、何なんだよ！？俺は、お前なんか知らない！」

「ククク…。いいぜ、もつと言いな！いくら言っても、お前が俺で、俺がお前だって事は変わらないけどな！」

この瞬間、陽介の精神は耐えられる許容量を完全に超えた。そして口から出たのは、完全否定の叫び。

「ふ…ざけんな、お前なんか…！」

——お前なんか、俺じゃない…！！

「…ああ、そうだ。俺は、“俺”だ。もう“お前”なんかじゃない」

今まで嘲りを含んでいた声は質を変えて、歡喜に満ちる。拒絶を“是”とする者は瞬く間に笑い声と共に異形へと変貌し、陽介は糸が切れたマリオネットのように再び地に膝をついてしまう。

「我は影…真なる我…。退屈なモノは全部ぶつ壊す。まずは…お前からだ！」

コニシ酒店にヒビが入り、亀裂が増えてバラバラと崩れ落ちた。一変して悠たちが立っていたのは、周りを大型テレビがとり囲むスタジオに似た空間。

不規則にユラユラと揺れる“それ”は、カエルのような生物の上に同化していた。

「…なあ、知ってるかよ？“俺”はお前を殺せば、お前じゃないお前として向こうに出て行ける。」

お前はここで…ゲームオーバーだ！」

大気を逆巻き、巨大な手が陽介目掛けて振り下ろされる。直撃すれば、待つのは死。力なく座り込んでいた彼を救ったのは、人にしては巨大な影と…

「大丈夫か、花村」

「…なる、かみ…」

…不思議な力、ペルソナに目覚めた鳴上だった。

Level 4…心の影（後書き）

次回は、戦闘から。

Level 5…呪縛も悲しみも吹っ飛ばせ（前書き）

すいません。今回は戦闘が上手くいきませんでした。

Level 5…呪縛も悲しみも吹っ飛ばせ

「どうしよう…。ちょっと花村、鳴上君…戻って来てよお…」

1人テレビの前に残された千枝は、完全に途方に暮れていた。両手で握りしめるロープは、途中で切れた為に何の役にも立たない。

（あたしには、鳴上君みたいにテレビに入る力なんてない。けど、このままだったら2人共帰って来ないかも…）

最悪の想像。俯く千枝は、顔を両手で覆って泣きたくなるのを堪える。

だから彼女は気付いていなかった。テレビに波紋が広がったことに…。

「行け、イザナギ！」

裂帛の気合いと共に、巨大な矛がカエルに向かって振り下ろされる。寸分変わらず断頭しようとした一撃を、影は白刃捕りでいとも簡単に防いでしまう。

ニヤリと笑う影を睨み付け、力任せに矛を引いたイザナギが後退する。悠の前を着地点としていたが、そこを狙って暴風の波が押し寄せた。

陽介の影が使うスキル《忘却の風》は厄介だった。広範囲の上に、連続で風が襲い来る。何度も攻め込むが、その度に。

「くらすッ！」

「ぐっ…！」

「鳴上！」「ヨースケ、今行くのは危険クマ！」

んなもん知るか。俺のせいで鳴上が傷付いてる。“黙って見てろ”は聞けねえよ！

アナライズするクマの隣にいた陽介は我慢ならなかった。望んでもいないのに、新しくできた友人は体中に傷を作っていく。他ならぬ自分のせいで。

クマを振り払い、悠の側に向かおうとするのを影は面白くなさそうに見下し、狙いを陽介に変えた。

「まだヒーローに夢見てんのか！なら、その夢ごと…お前らをぶっ壊してやる！」

陽介の影は、苛々と憎悪と殺意を風に乗せて叩き込んだ。イザナギは疾風が弱点。だが主の盾となり剣となるのがペルソナの役目。あと少しで当たりそうになった悠と陽介の盾となる為に暴風の前に自らを投げ出す。

澄んだ金の瞳が苦悶に歪む。イザナギのおかげで体を切り刻まれる事はなかったが、宿す悠にもダメージは伝わる。

その時、周囲のテレビが一齐に稼働し始めた。映し出されるのは過去の陽介。そこに、先ほどの早紀の声が音声として流れる。

「勝手に騒いで勘違いして、ほんとウザい……」

「ジュネスも、親も、何もかも。全部どうだっていい……」

「小西、先輩……！」

「ヨースケ、下がるクマ！これじゃセンサーの足手まといがオチよ……！」

「……分かった」

「花村！お前、本当に小西先輩が好きだったんだろ！」

移動する陽介に、悠は戦いながら声をかける。実際には余裕など皆無だが、言わなければならぬ気がした。

「俺が小西先輩を見たのは一度だけだ。それでも、これだけは言える。彼女は、お前を心から嫌ってはいなかった筈だ！」

でなきゃ、コンサートのチケットを受け取ったりしない。お前に笑顔を向けたりしない。例えばここが人の心に影響される世界でも映しきれなかった部分もあるだろ！？信じる、“花村陽介”が好きだった“小西先輩”を！」

座り込む陽介が顔を上げると、その目には自分を救おうと戦う悠が映る。

彼にとってその背中が強固なる壁。影にとっては悠自体が邪魔な存在。

「黙れ！ウゼエ、お前マジでウゼーよ！」

空中を駆け回るイザナギに手間取り、影の怒りがピークに達する。羽虫同然の存在に、闇雲に攻撃しても当たらない。

陽介は思った。影が扱う風が“暴風”なら、悠たちは“紫電”。こいつに、彼らは倒せない。

「何とでも言え。俺はお前には負けない。消えるのは花村じゃない。お前だ」

主の思いを力として、黒衣を翻し、暴風を避けながら、イザナギは矛をシャドウに突き刺す。苦痛に満ちた叫びを無視して、悠はとどめの一言を発した。

「ーイザナギっ！」

「ぐあああああー！」

『…なんとか、勝てたね』

広場に留まり、ずっと遠くから様子を見ていた風は安堵に胸をなで下ろした。ここからは肉眼では見えなかったので、カナヤに様子を伝えて貰った。

『さて、帰ろつか。……あ。そういや、テレビ前って千枝が居たよね…？どうしよう…』

行きの時は、千枝が俯いていたので上手く入れたのだが…。

その場にしゃがみこんで、戻って来たカナヤの頭を撫でながら思索する。下手に出れば、まず質問責めに遭ってしまふ。というか、出口のテレビがないからクマが来ないと出られない。かと言ってここに突っ立っていれば、悠たちがやって来る。

ークイクイ。

『うわっ…カナヤ、引っ張らないで？服が伸びちゃう。…こっち？
ついて行けばいい？』

立ち上がるうとしたら、カナヤがスカートの裾を噛んで引っ張った。それから彼女は宙を駆けて凧を案内する。

広場の隅から伸びる、人1人が歩けるギリギリの幅の通路を走って行くと、見たことのないダンジョンに辿り着いた。

否、見たことはある。そこは…

『私たちの、学校…？』

生徒玄関前でカナヤが止まった。目的地はここだったのか。だが、高校の校舎全体は不可視の壁に囲まれてそれ以上は踏み込めない。凧はしばらく母校を懐かしんでいたが、未練を振り払うようにカナヤと走り去った。

(どうして、学校がダンジョンに…？ううん、入れないんだから無理に考えても仕方ない。今は、ここで生きる事を考えていかないと)

来た道を戻り、広場が見えてきた頃…

『あ、鳴上君たちだ』

遠くに2人の人影が見える。無事に陽介もペルソナを手に入れたのだらう。

隣で、カナヤが上空に駆け上がる。様子見をしてきてくれるらしい。

クマと“犯人を見つける”約束をした後、悠たちは爆弾発言を聞いた。

「クマ、1個言い忘れてた。さっきまでセンサーたちとは別のニンジンの気配がしたクマ！」

「は…:…?」

「ちよい待て。それって、放り込まれた人か!？」

「知らない。クマの鼻でも一瞬しか分かんなかったから」

「おまつ、無責任だなオイ！」

詰め寄る陽介をあしらい、悠にくつつくクマ。フンフーン、なんて口笛を吹いているあたりが怪しいが…。

「はあ、しゃーなーな。鳴上、先に帰っててくれ。俺、クマの言う方向を見てくる」

陽介の申し出に、悠は首を横に振った。

「いや、一緒に行こう。陽介、疲れてるのに無理するな」

『うそ、2人がこっちに来るの？それってまずいよ！』

わたわたと慌てる風。足音が聞こえてくる事でパニクリそうな頭をフル回転させ、一旦さっきの校舎に引き返した。

……数分後。危なっかしい通路を歩いた悠たちは、八高ではない校舎を前に足を止めた。

途中クマが通路から落ちそうになったので、仕方なさそうに出て来たイザナギが脇に抱えて通路を渡った。

「ほいよつと、イザナギありがとクマ！」

「お前、もうダイエットとかいっそしてみろよ。って……うおっ、こんな所に校舎……」

目の前に建てられた、霧を濃く纏う校舎を見上げて陽介が驚きの声を漏らした。イザナギを戻した悠も同じく全体を見渡すが、やけに隣が静かなのに首を傾げた。

「おかしいな。クマが何も言わない」

ツンツン、悠が隣に立つクマを突つつく。左右にユラユラ揺れながら、振り子クマは校舎を見上げたまま悠に体を向けた。そのせいで、今度は前後に揺れるハメになったが。

「センサー、言わないって言うか、クマ言うことが無い。ここはただ何も無いクマ」

「どーいう意味だよ？こんなデカイ校舎があんのに、シャドウも何もいないのか？」

そうクマ。とクマが頷いた。何の変哲もない私立校の校舎にかけられた結界の影響だと。

「結界？霧じゃなくて？」

ピコピコと足音を響かせ、生徒玄関にクマが走って行くが、数メートル前でボヨンッと跳ね返された。

Level 5…呪縛も悲しみも吹っ飛ばせ（後書き）

気付いた方もいるかと思いますが、悠たちの会話を尻もすっかり聞いてます。

Level 6…守りの代償（前書き）

更新スピードが不定期ですみません。

Level 6…守りの代償

「こんばんは」。えっと、今日は私、天城雪子がナンパ“逆ナン”に挑戦してみたいと思います！」

題して、“ヤラセ無し、突撃逆ナン！雪子姫の白馬の王子様探し！”
”もうちょー本気イ〜！じゃ、行ってきまーす！”

土曜日の夜。マヨナカテレビに雪がはつきりと出ていた。てか、ドレスであれだけよく走れるよね。

雪が居なくなつた時、私は朝から買い物とか行ってて、他の人も捌はけてて。旅館は一時的に雪に任せられていた。

（マヨナカテレビ、ほんつとに趣味悪いよね…）

それが見た感想。毎回凝つていると言うか、本人が見ないつてのが不幸中の幸い。

次の日。千枝もすごく騒いでいた。何があつたか訊かれても、私は答えられない。

放課後、寝ているフリをして机に突っ伏していると、3人の話し声が聞こえた。私も行きたいけど、旅館の下働きが抜け出す訳にもい
かない。

「風、凧起きてる？もう授業終わったよ」

『…うん、分かった』

「（木野宮、なんか落ち込んでねえ？）」

「（バツカ、当たり前でしょ！雪子が居なくなった責任感してるみたいなんだから！）」

下を向いてしまった凧を見て、千枝と陽介がコソコソ話し合う。

「あの、木野宮」

しゅーん…と落ち込んでいる彼女の隣に立って、そつと悠が声をかけた。

ように見えたが。ぽつりと聞こえた呟きに、耳を疑った。

『……よ』

「え？」

『犯人め、月夜ばかりと思うなよ……』

（な、凧…恐っ！）

（木野宮黒い！黒すぎる！）

（え、これって影…じゃないよな？）

『みんな、何か言った？』

「言っていない！言っていないよ！ね、花村？」

「俺？！だ、大丈夫、何にもないからさ！な、鳴上！」

「え……うん」

揃ってビクリと反応したのを見咎めたのか、風の声のトーンが低くなる。背筋に寒気が走って3人だが、すぐに彼女の表情が柔らかくなって一安心した。

『そっかー。私の空耳だったみたい。旅館の手伝いしないと駄目だから、帰るね』

「……気をつけてよ？あたし、凧にまで行方不明になって欲しくないから」

バイバイ、と手を振って帰った凧を見送り、悠と陽介は気持ちを引き締めた。

「行くぞ、花村」

「おう！」

「ちょっと待って、あたしも行く！」

突然、千枝が声を張り上げた。瞳には決意の色が浮かんでいたが、陽介が真っ先に反対した。

「駄目だ。いいか里中、俺らにはペルソナがある。だから、シャド

ウに襲われても身を護れるけど……お前にはそれが無い。
どれだけ危険かは、分かっている。今回は俺と鳴上に「分かっ
ても、ほっとける訳ないでしょ!？」里中、落ち着け」

陽介に食ってかかる千枝。今にも単身ジュネスに向かいそうな友人
の肩に、悠が手を置いた。

「天城を心配するのも分かる。でも、里中に何かあったら今度は天
城が悲しむことになる」

「だけど……だけどあたし、雪子を助けたい！無茶はしないからさ、
連れてって鳴上君!」

「どつする、鳴上?」

陽介の問いかけに、目を閉じて考える。

いざとなったら、里中を連れて逃げればいい。無茶はしないと
言っているし……。

「戦闘は、全部俺たちに任せて。俺たちの後を付いてくることが条
件」

「本気かよ!」「ありがと、鳴上君!」

驚きを隠せない陽介とは対照的に、千枝は嬉しそうに笑う。納得し
きっていない陽介に、悠は耳打ちする。

「……なら、天城を探しつつ里中を護るのか。気合い入れねーと」

一行はクマと共に、雪子が居る場所に着いた。

「何ここ…お城!？」

中世ヨーロッパのような外観の城が、雪子の居る場所らしい。1つ異常な点は、入口が赤と黒の2色で作られていること。しばらく無言で城を見上げていた陽介が、クマを振り返って念を押す。

「あの真夜中の番組…ホントに誰かが撮ってんじゃないんだな？」

「バングミ…知らんクマよ。多分、何かの原因でこの世界が見えてるんだクマ。」

それに前にも言ったでしょーが!ここはクマとシャドウしか居ないんだってば!初めからここはこーいう世界!」

「だから初めからが分かんねえっての!」

放っておくとヒートアップしそうな2人に、半ば強引に悠が割り込む。

「花村、ここで言い合っても仕方ないだろ。今は天城を救うことを優先しよう」

その時、1人会話に加わらずにいた千枝が痺れを切らした。

「あたし、先に行くから！」

「里中、まだ…！」

悠の制止も聞かず、千枝の姿は城に消えた。伸ばしかけた手をそのままにしていると、陽介も一度唸ってから走ってしまった。

「あーっ、たく！里中のヤツどこまで行きやがったんだ!？」

イザナギとジライヤが辺りのシャドウを倒し、作ってくれた道を走る。遠距離からジライヤが牽制し、怯んだ隙にイザナギが斬り伏せて行く。

《見っけ！センセイ、チエチャンはこの扉の向こうクマ!》

「里中は無事か？」

《今のところは怪我も無いクマ。けど、なんか様子が変…》

ムム、と考えるクマの声が頭に聞こえる。しかし足踏みしている訳にもいかない2人は、目の前の巨大な扉を押し開けた。

雪子を助けたい一心でここまで来た。でも…あたしの目の前に居るのって、どう見ても…

「あなた、誰…？」

あたしにそっくり…だけど、こいつはあたしじゃない。そいつはあたしを鼻で笑った後、信じられない事を口にした。

「あたしは“里中千枝”…」

「嘘！里中千枝はあたしよ！」

八十稻葉に里中千枝はあたししか居ない。なら、こいつって偽物？

「違う。あたし“も”里中千枝。どうしようもないあなたから生まれた、もう1人のあたし」

（何、こいつ意味分かんない…！）

あたしがこの状況を把握できずにいると、目の前のヤツはとんでもない事を言い出した。

「…あたしは雪子に頼られてる。雪子を守るのはあたしの役目。けど、最近になってそれを奪う邪魔者が出て来た。凧は要らない。単なる邪魔者でしかない」

なっ、こいつ凧の事…！

「ふざけたこと言わないでよ！凧はあたしの友達、邪魔者なんかじゃない！」

「あはは、またそうやって隠す。雪子と旅館に住んでるって時点で気に入らなかつたクセにね？」

絶句。頭が真っ白になった。ハツとした時には、怒りがこみ上げてくる。

「好き勝手に言わないで！あんた何なの？あたしの事何かから何まで知ってるみたいに！」

「知ってるよ。“全部”…あんたが心の底に隠してる気持ちも言うてあげよっか。」

雪子つてば美人で、色白で、男子なんかいつもチャホヤしてる。その雪子が、たまにあたしを卑屈な目で見てくる…それがたまんなく嬉しかった」

「……！」

雪子が羨ましい。紛れもなくあたしは考えていた事が何度もあった。

「里中！」「無事か!？」

扉が開いて、探してくれていた2人が来た時、振り返ってから後ろの存在を思い出した。

嫌…。聞かれたくない、見られたくない！

思わず数歩後ずさって叫ぶ。

「やっ…来ないで、見ないでえ！」

「ふーん。今まで通り見ない振りして抑えつけるんだ、あたしを」

「……!!」「オヨヨヨヨ……!!」

背後を円周上に囲む黒い霧。そこから滲み出るシャドウたち。多勢に無勢、明らかに分が悪かった。クマは1人安全地帯に逃げ、上空ではジライヤとイザナギが背中合わせになって戦闘態勢に入る。

「クソツ、数が多すぎるだろ!!」

「悪態吐く暇があるなら、1体でも多く消すぞ!!」

悠たちがこの状況を脱しようと構える。しかしたった1人…千枝は動けなかった。

ガクリと膝をつく。自身の気持ちに制御が掛けられなくなり始めていた。

「……あたし、あたし……!!」

「もう認めちゃいなよ。あんたは薄汚い嫉妬の塊なんだから」

「黙れ!! あんたなんか… あんたなんか…!!」

ハツとした時には遅い。千枝に悠の言葉は届かず、彼女はトドメの一言を言い放ってしまう。

「… あんたなんか、あたしじゃない!!!」

「……あーはっはっはっはっ！ー！」

影が霧に包まれる。目を見開く千枝が見たのは、人を踏み台にして上に座り鞭を構える、影の姿だった。

Level 6…守りの代償（後書き）

次回は主人公がジュネスかな？

Level 7…紫水晶の怒り(前書き)

千枝の影戦、今回で決着です。もう陽介が主人公でもほんとに良いと思う。

Level 7：紫水晶の怒り

バシャツ。水溜まりの上を走り抜けてジュネスに全速力で走る。

(何かつ、嫌な予感がする…！)

私は、ゲーム内容を知っていた。近々アニメ放送というのも知っていたのに…！

何で早く気付かなかったの！？鳴上君たちは、“ペルソナを使えなければ丸腰だ”って事に！

『ああもう、急がなきゃ…！』

息切れを起こしても全速力で走り続けて、ようやく家電売り場のテレビ前に到着。周りに人がいないのを確認して、テレビに飛び込んだ。

『ペルソナ……カナヤ！』

広場に降り立ってすぐにカナヤを喚ぶ。眼鏡してないけど、気にする時間がない。勘だけど、急がないとまずい。

『みんなの所に案内して！』

ゆっくりと、影が鞭を振り上げる。恐怖が限界を突破した千枝は、知らぬ間に叫んでいた。

「いやあああああ!」

「里中——っ!」

声を聞き、陽介が千枝の名を呼ぶ。ジライヤが千枝を取り囲んでいたシャドウを手裏剣で切り裂いた瞬間、陽介が走った。

「っ!」

ドガァン! 轟音が鳴り響いた場所は、千枝が一瞬前までいた場所。間に合わない! と判断した陽介は千枝に飛び付き、抱えて床に転がる事で間髪回避に成功した。

「邪魔するんじゃないよッ!」

標的を潰し損ねた影が、髪を槍と化して飛ばす。千枝を抱いたまま身動きが取れない陽介を串刺しにするかと思われたそれは、間に割り込んだイザナギにより切り崩された。

「何、アンタも邪魔するんだ!」

影の周囲の温度が一気に氷点下まで達し、巨大な氷柱がイザナギを狙う。

そこにジライヤが盾となって氷柱を受け取めるが…

「ッ…うわっ！」

受け止め切れずにジライヤが後方に飛ばされ、陽介もリンクして吹き飛び、背中を強打した。

「はなむ「いい加減消えてよ。後はあたしがアンタになる。代わりに凧と雪子の面倒を見てあげる。…踏み台としてね！」

咄嗟に陽介に手を伸ばそうとした千枝の動きが止まる。恐る恐る影を見上げれば、優越感に満ちた目がこちらを射抜く。

「踏み…台…？」

「里…中、惑わ、されるな……」

「お黙りッ！」

「ぐあっ！」「花村！」

陽介の口を封じる目的で、影は髪を伸ばす。首に巻き付いた髪は、絞首刑のロープを連想させた。戒めを解こうとジライヤを喚ぼうにも、彼も髪に捕らわれて陽介自身には打つ手がない。

「このまま引きちぎってやるつか！？」

「べっっ…ぐ、ああ…！」

宙に体を持ち上げられ、苦しさから陽介が足をばたつかせる。

「嫌…止めて！あたしを消せばいいじゃんか！花村を離して！」

「里中！？」「おま、バカな事…言うな…！」

『…そつだよ。何ふざけてるの？千枝』

「な、」

「…ゴオオオオ！！ドサツ！」

「っ、ゲホッ、ゴホ…」

「チイツ…誰だ！」

今にも陽介の命を絶とうとした髪ローブが焼き切れる。倒れ込んだ陽介に、千枝が駆け寄る。そして、その場に新たなペルソナが1体。彼女は刃を影に向け、千枝たちを背に庇う。そして、咳き込む陽介の肩を叩いた人間がいた。

「…木野宮凧。」

『黙って聞いていれば好き勝手言ってくれて…。私の沸点も限界超えるっつーの』

「な、凧？」「遅いから迎えに来たの。こんな雑魚に何びびってるの？」「…あたし、」

俯きかける千枝。そんな彼女を、凧は苦笑し、抱きしめた。

『ごめん、ちょっと苛立ってたの。予想はついてたかもしれない。』

私だって、千枝の立場だったら怒るよ。……ごめんなさい。それと、無事で良かった」

「1番の邪魔者登場？しかもヒーローぶってんじゃないわよっ！」

「な、凧後ろ！」

『大丈夫。“私たち”は負けない。
——焼き払え、カナヤ！』

轟！劫火が辺りを舐めつくし、再び出現しそうになっていたシャドウが消されていく。だが、最も遠くに居た悠が一早く異変に気付いた。

「上だ！」

『っ、うあああああ！』

「凧！」「木野宮！」

反射的に千枝と陽介を突き飛ばした直後、絶対零度の鋭さが全身を貫いた。

油断した、と舌打ちしたい気分になった。けれども、頭が痛みを支配されて思考することが出来ない。うつぶせのまま首をなんとか動かすと、一際大きな氷柱が腹部を床に縫いつけているのが見えた。カナヤも先ほどまでのズライヤ同様に捕まり、魔法を使える状況ではない。

「さーで、次はどこを打ち抜いてやるうか？」

『ぐっ…よく喋るね…ちょっとは静かにしたら…？』

…このままだと、木野宮が死んでしまう。

悠は頭をフル回転させる。

イザナギでは、決定打を与えられない。陽介はあの状態だとダメー
ジから動かすと危険。

(どうする…！考える、何かある筈だ！)

— 貴方は先程、新たなアルカナを手に入れました。複数のペ
ルソナを扱える力、ワイルド。選ばれし者—。

「—」

切羽詰まった脳裏によぎる、ベルベットルームの住人…マーガレッ
トの言葉。

…そうだ。夢で言われたじゃないか。俺の力は“ワイルド”。選ば
れし者の力…！

「—チェンジ」

イザナギに手を翳す。分身は陣の光に包まれて蒼く輝く光球となる。意識を集中し、新たな分身を心の海より喚び起こす。

澄んだ金属音が鳴り響く。それは風の薄れそうな意識に浸透し、うつすらと目を開ける。霞む視界に映るのは、主から離れて喚ばれる炎の精—— ジャックランタン の炎と、名を喚ぶために動いた悠の唇。

「——ジャックランタン！」

ハロウインのカボチャが原点のペルソナが、小さなランタンを持って笑う。

「やれっ！」

リーン。ジャックランタンが揺らしたランタンから発せられた音色は炎へと変化し、カナヤの束縛を焼き切り、氷を溶かし、風の凍り付きそうな体を温める。

冷え切った体を労るように熱が伝わり、触覚や痛感が戻ってくる。同時に栓を失った腹から、生暖かい赤が流れ出した。

「おい、大丈夫か！？ジライヤ、頼む！」

服に血が滲む風を見て、ジライヤが傍に来てクルリと回る。腹部に暖かな光が収束し、止血がなされた。

『ありがとう、花村』

「お…おっ—！」

血の気の戻った顔でにこりと微笑まれ、陽介の頬が熱を持つ。グツ、と膝に力を込めて尻は立ち上がった。

『売られた喧嘩は3倍返し...』

ジャックランタンの炎の中、なんとか逃れるためにもがく影を見据える。実力勝負のこの場なら、やることは1つ。

『...お返しだよ...！』

「ああ、ウああアアアア...！」

ジャックランタンとカナヤ... 2体の炎に包まれ、影が悲鳴を上げる。炎が消えた時、影は千枝の姿に戻った。

「...あんたは、あたし...」

今までの戦いを見ていた千枝から、決意が... テレビに入る時とは違った決意が、受け入れの言葉となって紡がれた。影は蒼に包まれ、姿が変わる。

「これって、」

「ペルソナだ」

ゆっくりと千枝の前に降下してきたカードは、戦車のアルカナが描かれている。

『（ふう、とりあえずは一件落着かな）』

カナヤを戻し安堵の息を吐く間も無く、凧の体がバランスと力を失って倒れる。

「わっ、凧危ない！」

「ーっつと。大丈夫だよ、気を失っているだけだ」

背中から倒れそうだったのをそっとを受け止めた悠が、そのまま背中と膝裏に腕を回して持ち上げる。

（案外、軽いな…）

「ちょ、鳴上君、何やってんの?!」

「え…だって、こうしないと傷が開くだろ？」

（鳴上の奴、無自覚か？今の状況どっからどう見ても…）

にやにやと口元を隠して笑う陽介。それも当たり前。今の凧は気を失っているが、悠に“お姫様抱っこ”をされている。

（目を覚ました時が楽しみだなー。）

遠ざかる相棒の背中を見ながらそんな事を考える少年、花村陽介が居たのは、彼のペルソナしか知らない。

Level 7…紫水晶の怒り（後書き）

問題は尻のペルソナなんですよねー。質問責めにしようかな…。

Level 8…静けさの際立つ休息（前書き）

時間の空いた投稿。メインよりサブに力を入れそうで怖い。（笑）

Level 8…静けさの際立つ休息

『んー…っ、良い風!』

倫理の授業をサボって、屋上に息抜きに来た。今頃モロキンがうるさいだろうけど、なんとかなるでしょ。

『やってらんないよ〜 みたいなの?』

「いや、俺に聞かないで下さいよ…。つか木野宮先輩、確か転校初日から武勇伝作ってませんでした?」

隣でフェンスにもたれている尚紀。呆れた目で私を見ている。

『やっぱり知ってた? 私的には言い足りなかったんだ。でも第一印象って大切じゃない。だから控え目しておいたの』

「1年の間でも噂になってますよ。“モロキンに喧嘩売った最凶転校生”って」

『最凶…字が違ってない?』

「あと、他の連中はこうも言っていました。

“モロキンに睨まれそうになったら木野宮先輩を呼ぼう”とか何とか」

『わ、酷い。私って身代わり?』

尚紀の言っている事に笑いを堪えながら聞く。彼はそんな事考えて

いないって顔をしているし、こうやって話す機会が出来たんだから、サボって正解かな。

「しかし、驚きましたよ。まさか先輩が授業サボるなんて」

『1回くらいなら平気。大体モロキンの授業とか“授業”って言えないよ。私たちに文句言ってるだけじゃん？』

よっ、と軽く勢いをつけてフェンスから体を離す。私的には授業全部をメモして学校中に貼り付けてやるうかと思ったりした。

「戻るんですか？」

『そうだね。そろそろ授業も終わっ（キーンコーン…）あ、終わった！尚紀はお昼どうするの？』

「俺は愛家で食います。弁当無しなんで」

『そっかあ…。じゃあ、またサボって来るから今度はお昼持つてきてね！』

「……分かりました。それじゃ」

ドアを開けて階下に降りる。去り際に尚紀が楽しそうな笑顔を浮かべていた。

『…て事があつたんだよ』

「先輩、意外と顔が広いツスね」

学校が終わってから訪れたのは巽屋。最近“天城屋旅館のお使い”から“顔なじみのお客さん”にランクアップしました。現在、居間に上がらせて貰って完二が出してくれた羊羹を頂いている。

『ここつて（もぐ）馴染みやすい人が多いから、人付き合^{もくもく}いも楽しい。優しい後輩たちも居るしね』

「先輩、食うか喋るかどつちかにしません？お袋、茶つてあるか？」

口一杯に羊羹を頬張るのを見て、完二が台所に消える。ごくん、羊羹を飲み込んだ風は手早く菓子皿を片付ける。それから正座していた足を解き、ある物の前まで歩み寄った。足が痺れて歩く度にビリビリというのが嫌。

（山野アナが特注で作ったスカーフ、テレビの中にもあった。死因はシャドウに殺された事で、そこは不倫で傷付いた彼女が“死”を望んだからできた？小西先輩はコニシ酒屋が再現されていたし、共通点は影を受け入れ切れずに否定……暴走……？）

『あれ……ちよつと待って。今私、何で疑問系で考えてたの？』

どうなるかなんて分かっていた。それなのに、頭に霧が掛かったみたいに考えがまとまってくれない。

『おかしい…、変だよ。だって私、ツ!』

自分の口から何かが出そうになった瞬間、目の裏で火花が散った。同時に、頭の中で熱が生まれる。

『ツ…いった、あ…!』

「先輩!? どうしたんスか!」

ふらつき、頭を抑えて膝を着いた。私の様子に異変を感じ取ったのか、完二が駆け寄って来た。でも、今の私に返事を返す余裕は無い。絶えずバチンバチンと生まれる火花を、ギュツと目を瞑る事でやり過ごそうとする。

「凧ちゃん、大丈夫!?!」

ああ、駄目。完二のお母さんにまで心配掛けちゃう。

ポケットに手をつ突っ込んで、何とか携帯を掴んだ。けど力が入らずに手から携帯は滑り落ちる。隣で角張った手が白いそれを拾い上げた。

「お袋、先輩を病院『いい…。旅館に連絡して…』何言ってるんだ、顔真つ青ツスよ!」

完仁のお母さんが119を押しそうになるのを、寸での所で止める。代わりに旅館に連絡して貰い数十分後。

「凧、大丈夫?」

私を迎えに来たのは、なんと千枝だった。支えられながら訳を聞くと、旅館のみんなはマスコミの対応で手が離せない状態だったとか。

「何事かと思つたよ。いきなり雪子の家から電話が来たと思えば、異屋に凧を迎えに行つて欲しいつて頼まれたんだもん」

『ごめ、迷惑…掛けた？』

肩を支えられながら旅館の自室までどうにかたどり着いた。敷いてくれた布団に横になると、千枝は「全然！」と笑いかけてくれる。

息が荒い。まだ火花が散る。

「凧、調子悪いなら…明日の救出はあたしたちで行くから。ゆっくり休んで？」

『それは…私も「駄目だ」…鳴上、君？』

体を起こして襖に問いかけると、スーツと襖が開いて鳴上君が姿を見せた。後ろには花村もいる。

「オツス里中、電話つてこの事か。つか木野宮、めちゃくちや顔色悪いぜ？大丈夫かよ…？」

「…どうしても行くのか、天城を助けに」

何だか険しい顔をしている彼は、必死に見上げる私に確認するよう
に問う。ボーっとする頭で、首が動く範囲で頷いた。

「花村、天城の救出は先に延ばす。俺たちは戦力強化だ」

「木野宮がこの調子なら、俺も賛成。そうと決まれば、早く行くところ鳴上、里中！」

「雪子も助けなきゃだしね。待つてて風、シャドウに靴跡付けられるくらい強くなるから！」

『分かった。あんまり無茶しないでね？』

ー ー 体を包む浮遊感で、自然と目を開いた。辺りは霧に覆われ、3メートル先も見通せない。後ろから吹いてくる風に後押しされて前に進んで行くと、下に1本の道が見えてきた。

赤レンガで造られた1本道。知っている気がする。この先がどこに繋がるのかも。けれど、意識に霧が掛かったような感じがして、ぼんやりとしか思い出せない。

トン、と軽い足音を立てて道に降り立つ。いつしか道の表面には水が溢れ、足が着いたら場所から蒸発して水蒸気に変わる。

ー ー 君には、この霧は見通せないよ

『！！！』

風に乗って後ろから聞こえてきた声。それが風の鼓膜を震わせた瞬間、意識が一気に覚醒した。同時に、足下の水にも変化が起きる。まるで水そのものが生きているように動き出す。たちまち形を変え、何体もの水龍と化していく。生物となった水は、蛇のような動きで

一斉に風に襲い掛かる。

とつさに腕を交差させて防御姿勢を取った時、突然足元から見慣れた光が溢れ出した。

『どうして…？』

自らの意思では喚んでいないのに。蒼い光は、やがて白狐を主の前に顕現させた。甲高い鳴き声が、燃え盛る紅を発した。壁となり水を迎える炎は、相殺されて後に残るのは水蒸気のみ。

カナヤは鋭く辺りを見回すと、今度は短く鳴いて人型を取った。紫水晶の輝きを持つ瞳が、警戒と嫌悪を露わにする。

『カナヤ、何が…わっ！』

手を引かれ、彼女の背に庇われた。右手には抜き身の刀が握られて、着物の裾と一緒に前方に突きつけた。

《何のつもりなのかしら？この子には触れるなと警告した筈よ》

いきなり、意識と耳の両方に響いた凜とした女性の声。驚いてカナヤを見ると、その声は間違いなく分身が発するものだった。

Level 8…静けさの際立つ休息（後書き）

今のところ、喋るペルソナはカナヤだけ。他も喋らそうかな…と考
え中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9612x/>

ペルソナ4 交わる時・想い・世界

2011年11月21日22時43分発行